

大新潟湊展

新潟市歴史博物館「みなとびあ」では開館一〇周年をむかえるこの年、新潟の「みなと」に焦点を当てた「大新潟湊展」を開催します。本展覧会では、とくに多くの船でにぎわった江戸から明治期の新潟湊が果たした役割と、その特色を紹介いたします。

江戸時代から明治時代の途中まで、国内における大量物資の輸送の主役は船でした。そして運搬される荷品のなかで最大を占めたものが年貢をはじめとする米でした。大穀倉地帯である蒲原平野を後背にひかえ、信濃川・阿賀野川水系の出入口に位置していた新潟町は、河川流通と日本海海運とを結びつける水上交通の要所でした。江戸時代、新潟町は日本海海運の発達・興隆とともに日本海側屈指の湊町となつてゆきます。

現在の新潟市の市街地のかたちは、おおよそ江戸時代にその礎がつけられました。いままも市街地にその佇まいをのこす弓なりの町並、通りや小路による町割は、新潟が湊町として機能してきた歴史に由来しています。通りや小路に沿って掘られた堀には、信濃川や阿賀野川を下ってきた船や、廻船から荷物を積みかえられた小型の船が往来していました。弓なりの町並はかつて

の信濃川の流れに沿うかたちの名残であり、信濃川に接していた大川前通には諸国の船々の取引仲介をつとめた廻船問屋が軒を連ねていました。

新潟湊へ海・川を通じて訪れた船々は、様々な荷品をもたらしただけでなく、そうした荷品の運搬・売買に関する仕事や、船乗たちを「もてなす」仕事を盛んにしました。新潟町の人口をみると、江戸時代全般を通しておおよそ増加がみられ、幕末期の慶應三(一八六七)年には三万人を超えています。また廻船の入港数をみると、すでに元禄一〇(一六九七)年には三五〇〇艘を数えており、江戸時代のはやい段階で日本海側屈指の湊町となつていくことがうかがえます。入船数はその後いったん減少するものの文化四(一八〇七)年に蝦夷地が幕府直轄領となり、箱館への廻米の主要な湊になったことなども影響して文化年間には回復します。その後、入船数は天保元(一八三〇)年にふたたび三〇〇〇艘を超えました。

いままも新潟市内外の神社には、船乗たちが航海の安全を祈り奉納した船絵馬・和船模型等がのこされています。本展覧会でも、こうした船乗たちの名残を一部ではありますが紹介します。



■新潟湊之真景 井上文昌 安政6(1859)年 当館蔵

また新潟町でおこなわれた廻船の取引や運ばれる荷品、町のような紹介をします。

さて天保年間の新潟町は、琉球経由の唐物をひそかに売却するという、薩摩船による唐物抜荷(密貿易)の舞台にもなりました。この唐物抜荷は幕府に露見し、二度の摘発がおこなわれました。この抜荷事件は新潟町が上知されて幕府領となる契機のひとつになりました。

時代がすすみ明治を間近にひかえた頃、新潟湊は日本海側の幕府領であるということが理由のひとつとなり開港



■御買仕切 慶應2(1866)年 江差町教育委員会蔵
江差関川家によって新潟湊から買い積みされた「浦原御買」250俵の仕切状。

安宅 俊介

五港に選ばれました。こうして新潟は国際港としての歩みをはじめます。このことが新潟市の近代以降の都市の発展の礎となり、そのあり方を方向づけてゆきました。

新潟市の歴史は、この地が「みなと」であったということ抜きに、語ることはできません。この展覧会を機会に、新潟市の歴史的な特徴を「みなと」という側面から再確認して頂ければと思います。(あたか しゅんすけ 学芸員)

館長日記

Diary from the Director of a Museum

新潟市歴史博物館 館長 小林 昌二

湊足柵設置とミナト

「大新潟湊展」に寄せて

右企画展口上に「海と川が交わる流通の拠点、新潟湊の江戸・明治」を掲げています。

今春早々、市民から新潟のミナトのルーツについて質問があり、考えてみました。

当館の常設展「三方津の時代」(中世)で、ニイガタ、沼垂、蒲原の三津を紹介しています。その中でも蒲原津は、十世紀の『延喜式』に越後国の湊(国津)と見え、記録が示す新潟最古のミナトです。

しかし質問は、更に古い『日本書紀』大化三(六四七)年足利条の「湊足柵」にミナトがあったのか、を問うものでした。私は、ミナトの文字がない。柵跡が未発見。ミナトの有り様も不明。しかしミナトを伴っていたに相違ないとする先学の指摘(新潟県史「通史編」三九〇頁)がある旨をお答えしました。以下に些かの私見を加えて記します。

第一、阿賀北の十世紀までの古代遺跡を点にした図から、遺跡が河川や潟などの水辺に営まれた特色が窺われる。これら遺跡より少し前の湊足柵・磐舟柵も内水面で結ばれていたと推定



阿賀北の古代遺跡分布図 (田辺早苗資料提供・土田可奈原図作成 一部加工)

できる。

第二、湊足柵記事にも引き合いに出された「是歳、越国の鼠、昼夜相連りて、東に向いて移り去る。」という、難波遷都での鼠の予兆記事の数日後、「越国言、海畔枯查、東に向いて移り去る。沙上に跡あり。耕田の状の如し。」との記事があり、田を耕した様子と筏による木材搬出を想像させる。

第三、一昨年以來調査された四世紀前半の胎内市城の山古墳が、塩津潟に接していたことが指摘されている。されば、こことつながり、「海と川が交わる流通の拠点」はどこか。やはり信濃・阿賀の河口がクローズアップされ、高志深江国造より昔にこのミナトを掌握した豪族が誰かが問われています。

こうした城の山古墳の時代から古代・中世を経て繁栄に至った江戸・明治の新潟湊の拠点性は長い歴史の賜物といえましょう。

施設紹介

みなとびあはこんなところですよ!

10年目のおさらい

小林 隆幸

みなとびあは新潟の歴史や文化を体感し、楽しむことができる場を創るという構想の下に誕生しました。

その大きな特色は立地です。みなとびあは旧新潟税関庁舎(重要文化財)を中心に整備され、本館の建設をはじめ、新潟税関(国史跡)の史跡整備や旧第四銀行住吉町支店(国登録有形文化財)が移築・復原されました。幕末の開港五港の一つにあげられた新潟港を象徴する場所に立地し、敷地全体が文化財や史跡で構成されています。活動の中心になる建物が本館です。本館は明治四十三年に建設された新潟市役所二代目庁舎をデザインに用いています。

歴史を伝える中心になる場所が、本館内の常設展示室です。日本海に面し、信濃川・阿賀野川の大川の河口をもつ新潟は、水とのかかわりの深い歴史を歩んできました。それをわかりやすく紹介することを目的にしています。そのため、実物資料の数を増やすことよりも、各コーナーのポイントとなる位置に模型やジオラマを展示して、わかりやすさを追求しています。

そして、常設展示の理解を深め、また展示では表現が難しい内容を伝えるための設備がミュージアムシアターです。大型スクリーンに映し出された物語性のある映像は、歴史に裏付けられる新潟の特色をダイレクトに伝えます。

さらに新潟の歴史をテーマを設けて深く紹介しているのが企画展示です。当館学芸員の調査・研究にもとづき、年に四〜五回開催しています。回を重ねる度に新潟の歴史がさらに明らかになり、歴史情報が蓄積されて行きます。みなとびあは歴史に親しみ楽しむことを大切にしています。体験の広場は子供でも歴史を楽しく学べる施設です。ここに展示している資料は本物でも触れて体感することができます。また体験イベントを年間七〇回ほど開催しています。

詳しく学びたい方には、「初心者のための古文書解読講座」や、学芸員が講師の「博物館講座」、第一線で活躍する研究者を招いて開催する「館長講座」などを開催しています。講座では、市民の興味関心に幅広く応えることを心がけています。

また、一人で学習したい方には、情報ライブラリーを利用していただけます。ここでは約四万冊の歴史関係の書籍を蔵書し、学習をサポートするレファレンスの対応もしています。みなとびあは、新潟市民の財産である歴史資料を約一〇万点保管し、後世へ伝えるための保存作業を行っています。歴史資料に向きあい、日々、収集・整理・保管をしながら、市民が歴史を学び・楽しむための様々な活動を行っているのです。

(こ)ばやし たかゆき 学芸員